

大崎電気の分身「OSOL」がもたらせたもの

スポーツプロデューサー
杉山 茂



「OSOL」の旗を背に勝ちどきをあげる大崎セブン

大崎電気は、いつも新しい時代の鐘を自らの力で打ち鳴らす。98年、突然のようにチーム名を「大崎OSOL」と改めた。オールとはイタリア語で地球の核。ニックネームの命名ではなかった。企業が抱えるクラブ、の発想が潜（ひそ）んでいたのだ。45年前のチーム発足も、単なる実業団誕生ではなかった。生みの親、渡邊和美社長（当時、故人）は、取り囲んだ記者を見回しながら「世界進出がそのスポーツの消長を握る時代、ところがハンドボール界はその状況にない。大崎自体が日本の代表チームという考えでスタートします」と言ったものだ。時の流れのなかで、大崎はどのようにチームを活動させ、存在の意義を見つけ出すか。いつしか、それが「伝統」の発想にもなった。その姿勢とチーム力（競技力）は、皮肉にもかみ合わない。70年代からの低迷は、転機と期待された日本リーグ創設（76年）後も脱出できぬばかりか、第4回（79年）から3シーズン、2部落ちを味わう。

球団化へ突如の変身

精彩を欠いたまま80、90年代が過ぎかけた時、突如「OSOL」への「変身」である。当初、社内でのコンセンサスはあまり充分でなかった、と伝え

られた。真相はネーミングに関してのみで、クラブ化、一種の「球団化」への進路は充分な検討で煮詰められていた。ちなみに、登録チーム名は4年目に社名に戻る。すでにヨーロッパのトップクラスはプロフェッショナルイズム、コマースリズムが主流で、協会も、リーグも、クラブも「市場化」へ走っていた。国際ハンドボール連盟（IHF）が、その競技者資格規定で契約選手を成文化し、プロフェッショナル競技者を容認したのは94年である。国内の「実業団」でも嘱託の名で契約する選手が増え、全日本実業団連盟は同一事業所所属を唯一の資格としたが、そのこだわりも崩れ、砕ける。Jリーグ（日本プロサッカーリーグ、93年スタート）の成功、バブル崩壊による企業チームの相次ぐ撤退、縮小、文部科学省による地域スポーツクラブの奨励…。日本スポーツ界の様相は激しいばかりに変わる。「OSOL」は、そのタイミングをとらえた行動とあってよい。大崎の男子チームには外国籍選手を迎えない、とする不文律があると言われるが、日本人で契約選手を望み、プロを名乗ろうとする者には積極的な交渉を進めた。

日本球界再生への一石

チーム周辺には微妙な変化がのぞく。社名のもとに、チーム（選手）も社員も「同族意識」で結ばれ、応援にも熱がこもった光景は薄らぎはじめた。その分、ホームタウンのファンでどこまでカバーできるか。ホームゲーム1試合1000人の目標は「強い大崎、魅せる攻防」がようやく定着したのか今シーズンは961人をマークした。前年比318人増、前々年比713人増だ（いずれも数字はJHLニュース）。プレーオフは徐々に社員の一群と「OSOL」のファンが合体してサポート席を埋めた。このラインを確保しながらマネージメント力を上げれば実業団系クラブともいべき新境地の開拓を期待できる。企業とスポーツのあり方を自ら問いかね、時には迷走しながらも、古豪実業団・大崎電気は「OSOL」という分身をともなつて7年の才月をかけ、日本リーグ制覇へ到達した。この成果が、トップゾーンのプロ意識を加速させ、チーム（クラブ）自体も、ヨーロッパチャンピオンズリーグの覇者と王座を争うような夢をふくらませるようなら素晴らしい。そこまでの道のりは、平坦なものではないが「日本ハンドボール再生」へ今回の優勝が投げた一石は大きい。

「ハンドボールの契約」は、待遇面はもちろん、休養など時間的余裕といったメリットを与えたが、その一方で実力の世界における「選手としての責任」という厳しさも要求された。一方、GK濱口靖、森本彰宏、佐藤良彦、東俊介、豊田賢治ら、社員スポーツを望んだ現有勢力の発奮もめざましかった。当初は双方に葛藤もあったが、互いに刺激しあつて「勝ちたい」「勝たなければ」とチームの結束力を固めていった。そして、この04シーズン、全日本

藤良彦、東俊介、豊田賢治ら、社員スポーツを望んだ現有勢力の発奮もめざましかった。当初は双方に葛藤もあったが、互いに刺激しあつて「勝ちたい」「勝たなければ」とチームの結束力を固めていった。そして、この04シーズン、全日本

実業団、国体のタイトルを獲得。全日本総合優勝は目前でファイにしたが、ついに日本リーグ初制覇という悲願を果たした。レギュラーシーズンを1位で駆け抜け、プレーオフで挑戦者を突き放すという価値ある勝利だった。

さらには高校生や中学生を対象にしたサーキットのチーム指導、ファンクラブの拡充など地域貢献やハンドボールPRにも積極的な姿勢をみせている。王者復活を遂げた名門・大崎電気は、これからの進化を続けていくに違いない。

1960（昭和35）年の創部以来、全日本実業団で不滅の10連覇（60～69年）をはじめ、国体で9連覇（61～69年）、全日本総合や全日本室内（現在廃会）のタイトルも数多く獲得し、創成期の10年あまりは「全日本イコール大崎電気」と言われるほどの黄金時代を築いた。しかし、大同特殊鋼や湧永薬品（当時）らライバル勢が台頭してきた70年代に入ると、チームの戦績は徐々に下降線をたどり、71年の全日本総合優勝からタイトルに無縁のシーズンが長く続いた。76年にスタートした日本リーグで

84年、85年の全日本総合で連続2位、そして86年の山梨国体で17年ぶりの優勝を遂げ、再び頂点に立った。そして、采配は斉藤監督へとバトンタッチされ、矢内、山本、宮下、首藤の4選手をソウル・オリンピックに送り出した88年、翌年の89年と2

90年代は、またしても苦闘が続いていた。日本リーグは第15回から3年連続して5位、全日本総合もベスト8敗退が3年続き、次々と日本タイトルをさらって円熟の境地にあつた女子部の陰に隠れた格好となった。その後も中村荷役（99年3月に活動休止）、大同特殊鋼、湧永薬業、ホンダらが世界的な名手を補強して戦力アップを図っていったのに対し、日本人選手だけの、純血で戦う大崎電気の劣勢は否めなかった。第18回、第19回と6位、第20回では4位まで順位を戻したが、第21回5位、第22回と第24回は7位に低迷して2部との入れ替え戦を余儀なくされた。そして、新世紀を目前にした99年、大崎電気は大きな転機を迎えた。奇しくもチーム結成40周年を迎えたこ

そして、01年4月、この年に休部となった三陽商会から若本真典、中川善雄、永島英明のトリオが加わった。いずれも大崎電気が初めて導入した契約選手制度による移籍だった。「大崎電気が強い選手の輩出場所になるのはもちろん、ハンドボールの、キャリアパス、を持ちたい」とする選手たちの夢をかえってあげたい」（渡辺光康部長）という決断。そんなスタンスが「ハンドボール専念思考」を持った若い世代の心をとらえ、宮崎大輔、猪妻正活ら期待のホープたちが続々と大崎電気と「ハンドボール契約」を交わし、スター軍団を形成するまでになった。

黄金時代築いた創成期



日本リーグ初V

名門・大崎復活の光と陰

は第1回4位、第2回6位とランクを落とし、第3回は7位に甘んじて屈辱の2部降格。2年続けて入れ替え戦に僅差で敗れ、屈辱の2部暮らしを3シーズン味わった。まさに雌伏の時代と言えた。そんな大崎電気が、ようやく80年代なかばに入つて反攻に転じた。第6回日本リーグ入れ替え戦に辛勝して1部復帰。その後も第8回、第9回と入れ替え戦にまわる苦戦が続いたが、「もうみじめな思いをするのはイヤだ」という斉藤幸司（元監督）、長野透らベテランたちの鬼気迫るようなリードもあつて1部に踏みとどまった。

年連続で国体、全日本総合を制した。この頃から毎年のようにチームをヨーロッパ遠征に送り出した会社サイドの力強い支援も大きな勇気づけとなった。こうなると、ぜがひでも欲しくなるのが日本リーグタイトル。しかし、そうはさせじと湧永薬業、本田技研鈴鹿（現ホンダ）、大同特殊鋼らが入れ替わり大崎電気の前に立ちふさがり、その進撃にストップをかけた。現在のようないろいろはなく総当たりリーグのみで優勝が争われたシステム。一戦必勝のトーナメントには滅法強いが、ロングランのシーズンを戦い抜く安定感に欠けていたとも言える。

遠かった日本リーグV

の年、会社の事業基盤をより強固にするための一環として2000年春から女子の休部を決めたのだ。「毎年好成绩を残している女子をなくすのはなぜ」の声も多かったが「ハンドボールの大崎電気をアビールするのは、やはり男子の復活以外ありえない」という強い決意がうかがわれた。



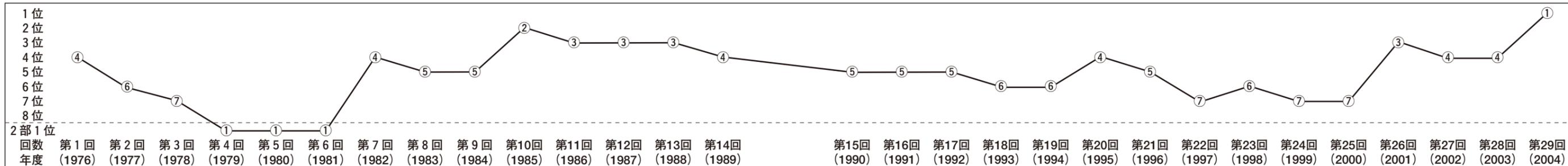
1989年の全日本総合で2連覇を達成した大崎電気セブン

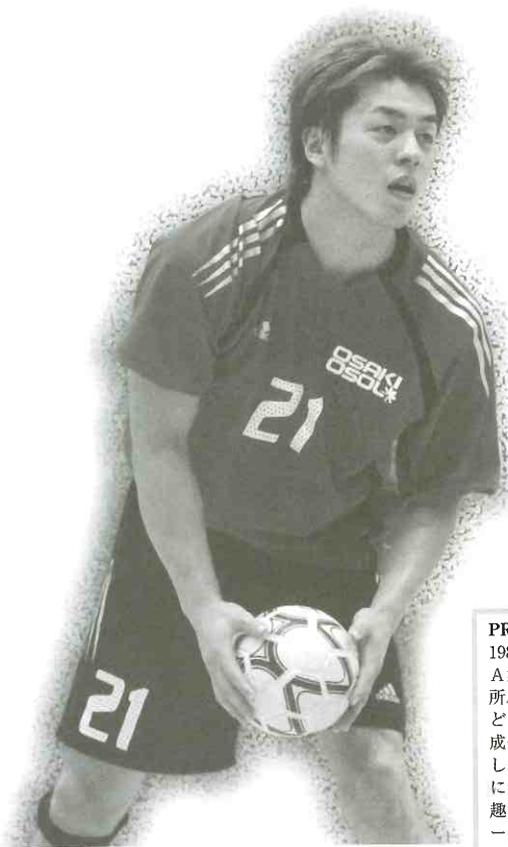
強い決意で再び上昇

そして、01年4月、この年に休部となった三陽商会から若本真典、中川善雄、永島英明のトリオが加わった。いずれも大崎電気が初めて導入した契約選手制度による移籍だった。「大崎電気が強い選手の輩出場所になるのはもちろん、ハンドボールの、キャリアパス、を持ちたい」とする選手たちの夢をかえってあげたい」（渡辺光康部長）という決断。

大崎電気・日本リーグ

順位推移 (第23～25回はチーム名がOSAKI OSOLで出場)





No.21
Daisuke
OSAKI

FROM DAISUKE

VOL 4 「多くの人に支えられた1年」

PROFILE

1981年6月6日生まれ、23才。A型。175cm、73kg。大崎電気所属。スペインリーグ留学などを経て、全日本のエースに成長。抜群の身体能力を活かしたプレーとファンを大切にしている姿勢で人気も抜群だ。趣味は映画鑑賞、アクセサリ一集め(Dear-M)。

激闘のシーズンがついに終了。宮崎選手と大崎電気にとっては初の日本リーグ制覇という最高のフィナーレとなりました。プレーオフの話題を中心にしながら、宮崎選手が「思い出深かった」という今シーズンを振り返ります。

※このコーナーでは宮崎選手への質問、メッセージを募集しています。本誌で採用された方には宮崎選手のサイン入り写真をプレゼントいたします。

21 極限まで高めた集中力 プレーオフ優勝を達成

皆さんの応援のおかげで日本リーグプレーオフで優勝することができました。

優勝した瞬間は、実感がわかなくて意外と冷静だったんです。みんなが抱き合って喜んでいるときに、僕は審判に握手を求めにいったりしてましたからね(笑)。

もちろん、うれしかったんですけど、ほっとした気持ちの方が強かったですよ。プレッシャーから解放された感じでした。

このプレーオフはすごく集中して臨んでいたし、絶対に負けたくないと思っていました。じつは、大会前の練習中に左足をねんざしてしまっただけ、痛み止めを飲みながらプレーしていたんですが、集中していたからそれも気になりませんでした。

スポーツの世界では、集中力が極限まで高まった状態でプレーすることとを「ゾーンに入った」と表現したりします。準決勝のホンダ戦の後半は、まさにゾーンに入った状態だったと思います。

いつもは「DFを抜いたらGKを見て空いているコースを狙おう」とか考えながらプレーするものですが、このときは、無意識だったんです。空いたコースが自然に見えてくる。それが無意識にできたんですよ。MVPに選んでもらいましたが、こういう賞は僕一人の力で取れるものではないですね。自分が悩んでいるときに支えてくれたチームメイトや応援してくれたファンがいたからこそこの結果です。

チームメイトやファンあってこそ自分。今年1年で、その思いが本当に強くなりました。

21 実業団1年目は 思い出深いシーズンに

今シーズンを振り返るとあつという間だった気もしますが、思い出深い1年でした。

シーズン当初は、スペインでやってきた自信もあったし「日本リーグはこんなものだな」と思っていた部分もあります。でも、中盤戦あたりから、自分のプレーが読まれはじめ、ミスが多くなったり、苦しい時期を経験しました。

チームの先輩などからアドバイスをもらったりもしながら、プレイスタイルを変えたり、自分を見つめ直すことができました。

チームも全日本総合選手権決勝で負けを味わったことで変わりました。それまでに2冠を獲得していたことと「おごり」というわけではありませんが、どこかに安心感があったのかもしれない。

屈辱的な敗戦だったんですが、いまま思えば、僕たちにとってはプラス

の経験、プレーオフに勝てたこと、1つの勝因になったと感じます。

21 ファンの応援に感謝 来年も期待して欲しい

今シーズンは試合後のサイン会などで皆さんのファンと触れ合うことができました。僕たち選手にとっても試合でプレーを見てもらうことが何よりも大事なことです。来シーズンもファンサービスはもっとやっていきたいと思っています。

大崎ファンの応援には何度も助けられたし、また他のチームのサポーターからはブーイングも受けたりしましたが、それもいい刺激になりました。試合を見に来てくれたすべてのみなさんに感謝したいです。

1年を通して自分のプレーを振り返ると、反省することの方が多い。だから、来年はもっとやらないと、という気持ちなんです。

プレーの標準を「世界」において自分を磨き、見ている方がもっと楽しく、もっと騒げるようなプレーをしていきたいと思っています。

来シーズンの僕にも期待してくださいね。

PRESENT



今シーズン応援してくれたファン皆さんへ感謝の気持ちを込めて、宮崎選手からプレゼントがあります。(A)大崎電気で使用したウィンドブレーカー(B)日本代表で使用した練習ウェア

ご希望の方は①氏名②年令③住所④電話番号⑤希望のプレゼント(宮崎選手のサインを入れて欲しい方はその旨を明記下さい)⑥宮崎選手にやってもらいたいファンサービス(必須)を明記の上、ハガキ、メール、弊社HPにてご応募下さい。締め切りは5月末日。